小栗外傳

初編

二

ヘ13
204
2

鷹嶹先生著
名和對月書

新選普通 作文必用

中本 全二冊

右書ハ頭書作文類語數多ク揚ゲ本文ハ日用文ニテ皆々短文ニ綴リ小學兒童ノ作文一助書ナリ且ハ商家ニハ必ラズ便用ニ可相成珍書本也江湖諸君購求アランヿヲ知リ玉可シ何方ノ本屋ニモ有外御求被下候

書肆 大阪北久寶寺町四丁目十八番地
文榮堂 前川源七郎

北郵蔵

寒燈夜話 小栗外傳巻之二

東都 絳山歡醼陳人戯編

第三編

鳴鳩を射て小手婚を扬を
鮎を網して勇士命を落す

斯て其日になりしかバ。小栗満重小次郎が伴ひ。名武が館に至りしかバ。小栗ハ爲て待うけて居るなれバ。篤光かぎりなく喜び。多くの数ゝ待るゝ。小栗親子ハ主の慇懃なる饗應に心落し。園の裡を徘徊その風色を詠るに。殊ゝ美なる花擁の今ハ年ハいろ色はまりぬれバその数ゝ何と譬へん方もなく。園池の岸辺に咲く棣棠よへ。英含こよなし。水に住む蛙ハ鳴うちにも折ぐる百禽の。これに對して囀るさま世の中に喜ハ此池のあるかと思はれて。その折から池の中にいろくの魚ともの浮み出て遊び

學校蔵書
へ 13 旅 イ 14 2

さるを何方ともなく一雙の駒鳥飛來りて啄まんとするぞ。主の篤光是を
見て悪き鳥なれ。誰かあるあの鳥射よとありければ
篤光の妻舅横山太郎安秀といふ者あり。是は従者が身にて故は武藏國
の一領主なりしが爲人時悪狼戻にして驕強く朋輩に疎れし民を逆使こと
こと大かたならず終に其民暴逆の命に絶ずして屡鎌倉へ嘆き訴へしかば
應永三年前の管領氏満公の御勘氣を蒙り采邑の地を放され世のさまぞ
まひなりかりて婚賀なれば篤光に身を寄て再び舊領に復さんことを計り
ける然るに今日しも小栗親子の来たれば其饗しの爲に宴席を連ねて
ありけるが。只今篤光がいふを聞て某此鳥を射留て一興を添んと
いと易こそなれと云侍る白眼を凝し重籐の弓に燕尾矢をつがひまで彈絞り
放てばさこそいふに駒鳥に中らずして檐の枝に射落しより安秀は鳥を
射損じ前の廣言に似るべくもなく。いと面目なげにみえしにぞ。そのとき見
篤光小次郎に對ひ足下の射を見まほしく参りね。あの駒鳥射てみよかし
すんやといふに小次郎莞爾とし。未熟の某いかで志とあらはん。さりながら
宜のを上旨と辭すれども猶再三に乞れければ是非なく弓矢をとり
て檐の木陰にかくろひて駒鳥の下るを待所に前の矢に懲もせで又も
奥くを啄んと池の汀に飛下るを待まうけたる小次郎。矢比近くなれる所にて
觀定て放つ矢に鳥のたゞなかを射とめけるが。過ず射もたがはずこそ見えけれ汀の
方に落けり。人々これを見るよりも喝采しけりやくと誉る声。少刻
ぞやみて歇ざりし。篤光涼く小次郎が射藝を感じ。嗚呼後世おそるべし
とは足下のことなり。まこと手練と思ひきや斯まで射藝に老練なりし
とる武士の身にとりこれにまさる事やあるべき未だ齢このあまれ少年やと。

称歎すれバ。横山ハ元来人の能を妬むものなれバ。我射技に長じたる誇と。
小次郎に射とられ易からじと想ひ居たる光。小次郎ハふかく感賞されバ
嫉妬をかぎりなけれど。何とも云べき方なし。されども此まゝにやむも
本意なき事。小冠者射てとハ少く善されど。其故実のごときハいかでか
知べき。我その故実を述て彼を感服さし。今日の恥辱を雪ぐべしと。心に
念じ。進み出て云へりけるハ。小次郎どのゝ此光景を見るに古の牛若丸
にもおさ／＼劣るまじとぞんじ候。かゝる射藝に鍛練の人なれバ定て其故実
をも知尽して給ふらん。我に説きかし給へと云へバ。小次郎ここにおゐても
かけねことばもかりそめの事なれバ。少しく答ることもあれど弓矢の道その奥と
する長者の傍にして。おぼろげなれバことにかなふべきにあらず。此事免し
給へと固辞されバ。横山いよ／＼其射術にもおとるをいと下手ぞと笑ども年

老けれバ粗故事をも知る事ありて。そも／＼弓ハ唐山におゐてハ小皡の子
般始めて弓矢を作る。我国においてハ日本武尊東夷征伐のとき是を
出来るりと古記書にあるよし。又弓の製作品々あり。弓の内外の節に十三
の節を設て各名目あり。これに十三の佛體を配せり。足下此事を知給ふ
や否。小次郎。そハ某も及ばざれど宣ふ処を何国の書にありや。詳かに知らし
玉へ。横山嘲笑て云。書に出載るにあらず。いかでか書生ハ皆弓の師ならん。
我いふ処ハ師傳にして弓家の奥秘とする処なれバ。尋常の人の知べき
にあらず。此傳にしても射るものハたとへ中るといへども闇夜の礫ぞ。
犬の蚤にしてはなれ幸と云ものなりと。小次郎をさして嘲るがごとく
云へりしかバ。小次郎これを聞に堪ずして。某が業ハいと未熟にして中つるとも
中らずといへど足下の宣ふ処とハ異なり。夫弓の濫觴ハ唐山に於て。

小栗小次郎
弓法を論ず
照天姫
侍従
小栗満重
小栗小次郎

伏犧の時より始まり大白陰経に曰庖犧氏木に絃して弓とし木を剡く
矢とすと云云又弓を製するには六材を用ゆと云へり所謂幹也角也筋
也膠也絲也漆也と云へり又周礼の註にハ弓の長さ六尺六寸之を上制
と云六尺三寸これを中制と云六尺をもて下制と云云天朝弓の起なること
舊し日本記神代巻に天照太神手に弓弭を振うとと云詞あり爾れバ
日本武尊より濫觴にあらざることを知るべし。また十三の節を用ゆとのことなれ
されど上古の弓ハ曾て節を定ることなし。或ひハ七八あるひハ九十に至る。
さらに一定なることなし。たゞ竹の厚薄肉の強弱によって其宜きに随ひ
割ものにして善悪を考へ用ゆ。のちに節の数にかゝわり佛菩薩に配当す。それ
又弓の中ることによって禮記射義に曰射者ハ進退周還かならず礼に
中る内志正しく外體直ふして然て後弓矢を持こと審固なり。弓矢を持

しく審固にして然て後以中ことを言べし。此以徳行を観べしとあり爾る
時ハ中ることハ己が心と身とを正すにあり。いかで弓わ名所を知にあらん。
と言静に述けりしかバ。横山これに對する言なく。赤面して居たりけれバ小栗
満足し。小次郎を瞞と白眼汝幼弱にして大人の前を憚らず漫に言を
放ことやはとれはし。早く甚罪を謝て此席を退べしと言あらゝかになり
ければ。小次郎ハ父の怒に畏れ。すごすご其席を退出んとするを。主の篤光
小次郎が文武の道に賢きを心中に感賞しければ慌忙これを留め。小栗
どのハ怒さることにてハあるべけれど。これハたゞ一時の雑談のことなれバ心に
かけず捨て免しあれかしと云けり。横山を顧て足下主として無礼
言をしけるによりて客人の心意を損せり。その罪を謝し給へとあり
ければ横山心裡ハ無念なれども。篤光が言葉しかたく。小栗親子に對ひ。

其よしなき言をのべては氣色を損ずることいとも甚し。只今の言は酒狂の
うへの戯言なりけば。仏にさぶらはゞなぞは免ありて今一杯をきこしめせとすゝむ。
小栗親子もうちとけて心よげに見えけれど。是まで恥て従ねれば至るところ
うち解て。まことも酒宴を催しけれども。横山は前よりありし村役じ後文
論ふけじめられ両度まで恥を受ければ影護て何となくその席を
退出たり。それより横山小栗ふ仇せんと想ふ心ありて發端て。斯て良閑に及び
ける時。篤光小栗に對ひて申けるは今日の酒宴あまりに興なし。ひとかゝ
かゝれは倦れど。女兒ふては照天が一曲をば聞に入んはいかゞぞと申ければ。
満重是を聞て。令愛の琵琶ふ堪能なるよしは。豫て風声に承はれどその曲
をいまだ聞ざることの遺恨に候ひしに。まことに幸なり。いざとく聞せ給へと云ければ。いざ
さらば這裡へ召さるべしと奥より下部を従ひ。更に酒肴を出し。

饗應なり時篤光の妻は侍従女兒照天姫を伴ひ。手盤に一面の琵琶を
齎らし出來て小栗親子ふ對ひ邂逅ゆへるはせまふふはのいかなけなくいと
不興のことなりと云ふもあふれは。小栗は前刻よりさまざまと懇望
ありし饗應に然るれとのべさて照天姫ふ一曲を所望ば侍従は微笑て。
女兒が琵琶は。よくも弾べきぞふ稀は聞えまいらせども鳴手がましあれど。
望まし給ふと辞はつくさもれなかれは命にまかし略つつある一曲は
ゆめかしはのらふせんとそれぞくとあれ。照天姫は心を悩く。琵琶をきこあ
今様一曲を唄ひふかく其声微妙にして人をしく感動ぜられば小栗満重
ふかく其貌のうつくしさ感愛し此女兒をりて小次郎が妻となしめが。
好配偶あらしと頻に念ど。只顧照天姫を称ふとれば篤光甚よくろび
推し此秋のころも宿志をも云なめと言を正して云ので此席にて

國へ帰さんハ甚だ易けれど。足下と某とが交りハ。たゞ兄弟骨肉のごとく一朝のことにあらず
永く他門なれバ。此交を[illegible]て子孫に傳へんとしに。依て思ふに足下に令郎
あり我に女兒あり。これを娶して夫婦となせバ両家永く因を結ばん。此ことを
いかにおもふやと云ふに。満重とかうの思ひ。おもはず手を拍て云へりけるハ。
某その心あれども足下一人の令愛なれバ他に嫁しがたからんと思ひたり。
云ひも出さざりしに。其宜きハ一不圖幸なり。さるあれ内君のほとり終
いかならんとありけるに。傳從これを聞て。さぶらふ夫の命を承りぬ。妻なる
ものゝ身なれバ。奴家も共に小次郎どのゝ女婿なれバとありくて喜びへ
をとも。いかで憂とハ思ひ申さん。小次郎どのと女兒が赤縄ハ千代ハ
八重かけつらぬ石の巖となりかゝれ契の祈なりぬと回答をなすにぞ。
満重喜びに堪へず。小次郎にうち對ひ我娘と室とあらせんとぞ。

年ごろ初弱なれども且其心操正しく良兒なれバ。其ことなくて有けるに。
今日不図も高光大人令愛をもて渠に嫁さんと宜へり。照天姫ハ氏と
いひ才貌世に勝れ。渠ハいとゞ高運のほどと雀躍して喜べど。
小次郎も父の慈愛の忝なきに喜びの色顔に顕はし。愛着してぞ
居ならびける光夫婦も。小次郎が強ひとて。さては彼兒も諾ひぬ。
女兒照天姫にうち對ひ。此年頃はまさしき女婿を求しかど。是ぞとおもふ人
もなく心苦しくありけるに今日不図も。小次郎どのを女婿と定まり
ぬ。彼人こそ家柄といひ。当世稀なる並びなき才貌両全の少年なり。
その才藝のみならず。既に今日鳥を射たまひし弓藝の妙ぞ知りぬ。此人の
妻となりなバ女御后となりしも同じ幸ぞかし。今よりしては。小次郎どのを
夫とされバ満重大人ハ舅なり。これぞ父とも見まつり。よく孝行に

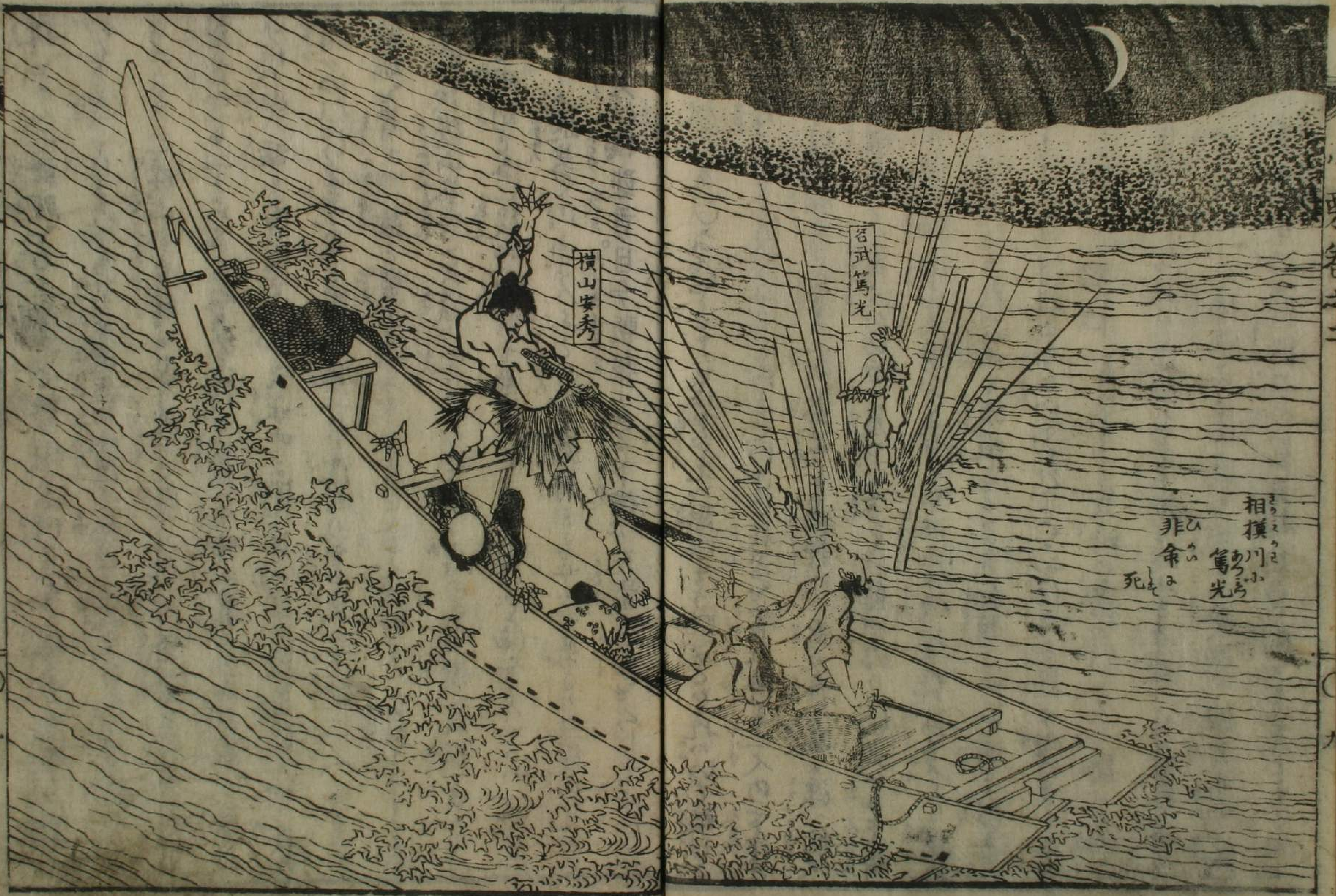
かしづきて婦道を守りしとぞ。かくて又かたらふ照天姫ハまだ幼
けれども是を心に悦びてや。塵を捻りて回意をバ微笑がごとく知らし
めり。満重も名武夫婦も。小次郎と。照天の二人が喜びの色を面に顕し
されバぬらく喜び。小栗満重ある光に対ひ。今日ハ奈何吉日ぞ天地
良縁を下し。名武小栗の家永く因を結ぶべしとふ常言に善ハ急げとや
何か其日ハ良辰なり。今日に納采を贈り婚縁が固つるべしとあへる光
もさらなり妻子も倶に歓びて実業の宴を催しけり。既に今日も暮
ければ小栗親子ハ別を告我家にこそハ還りけれ。さて其日より
うち小栗がかとより納采の如く整へ名武がもとに贈りたれバある光
ハ直ちに受納め。一門の人々に歓ぶるのよしを披露して悦びの宴を催し
又執此日横山安秀もこの宴席に連りたりしある光小次郎を女婿になせしは

はじめ心裡憤りを発し。彼小次郎なりハ前日我に両度まで恥辱をあたへし
仇人なり。其時の挿くなくバ。ある光目前に昔しあれバ我彼を恨むといふとも
よく知りてぞ居らん。妻舅の誓ひと思ふ人を女婿にせんとすること心を得ず。
是をもつてこれを想へバ我を甲斐なきものと侮り忽ち縁者の固を捨彼を
婿縁を結ぶなるぞいとゞ怨めしけれ。さる流浪の白痴なれバ我も又その因縁
故ぞ此憤りを晴さでおくべきと念じたるぞそれより深くある光を恨めど手段
於害しへる恩あれバ明白に恨んこともなしがたく。寛さへ角さへ案じわづらふ
以人どさるべき術もなかりしかバ空く月日を送りたれ然るに一夜式部お輔
詮秀と横山左衛門安秀とハ甚だ昵しけれバ同気相合ふていと親しかりし
程に一日横山一族が館に行四方八方の物語り此折から前年佐々女が命
の欽寿堂を毀し終に及びたるに一夜の言ありたるハ其時の事光景を

小栗各武の二人明白に申上しほどに我家秩家に疑ひ晴けるにより今
幼君の時代になれど尚故のごとく近習の役人より退られしが小栗各武
は支へられそれより世の中には此恨を晴さんと云を聞てより方人よく横山聴え
あらためて少み所とよる光に恨みあることの子細を語り我に方人しけるが。
足下の恨みを晴させしとあるに緒秀喜びそうらば這般ことにまかせしと。
密談数刻に及び終に別れて去るまで不在話下。今年もはや仲秋の頃
おひになりけるが相模川の鮎その年よりも夥しく鎌倉中の老銭彼所
に漁猟とる人多かりしに篤光原来魚猟を好むの癖ありて四時の附く海
川の獣なく或ひは鈎しあるひは網せしに近日人の風声を聞て我も彼所に行
なんと其の猶備をするを横山窺ひ知てければ一日篤光に對ひ近日相模川
にて僕物あるよし。たゞしの見ありとくれば伴して漁猟せばやと存るに。

おぼしたくせなひ給んやと申せば。篤光は想ひまうけしことなれば。いと嬉げに。
いとくも供えすべけれのゝ此さぐらんとて。わざと従者を省き僅に二人の下僕と
横山とを伴ひ朝まだきより家を出て程なく相模川に至り舟を流に浮べ網を
下して漁猟をするに。実人の知るにも差つぎ多くの鮎を獲りしかば篤光斜
ならず喜び。尚網を下さんとするに日もはや西山に傾きければ。残多くも還ん
とせしを横山云へりけるは某も漁猟をすること。幼稚よりして好み侍りしが。
一回の此川へ来りけれど今日のごときことをおぼえず。斯る時は今少しある
べきもなし。今少しの網を下しあるべき。些許の魚をと獲るべしと勧めに帰る
道とて篤光は横山が云も道理なり。又斯る時にも逢難からんと又も舟に
棹さして四方に網して漁猟するに。夜も漸くに更闌て。漁舟も少に残
比及横山安秀東西を回顧。目今篤光余念なく網を下さんとする処を。

小栗 巻之二 十



櫂をとりて洸脛を力にまはして撃ねどふ何かハりて堪べきや。忽ち水中にがはと落たりされども篤光武藝水練に熟せし丈夫なれバ水を游ひで上らんとするを横山安秀櫂をとりて連打に撃るれバ可憐篤光打物取るハ鎌倉中に二とハ下らぬものなれど不図水中に落たるに且数ゝふ撃れされバ如何に猛くありながら終にハ水中に溺れて失にけれ是佐ヶ谷の翁がいひけん事にてふまさに其一ッを説せり。篤光が下僕二人ハ主の最期を着て愕然と驚き。ひかすこともせんと途ふ怫然としく居よりし故横山安秀ハ後の害ありと前に居りし下僕をバ抜手も見せず両断となし後の下僕も逃さじとまたも斬けるを身をかハし避んとせしが過失て川にざんぶと跳び落浮こもやらで失にけり横山完尓とうち笑ひ。獨語。目今斬殺しける下僕が死骸に石をくくして水中に投入れ舟中の血を灌ぎ洗ひ又舟を巡らし篤光が屍を捆りて引揚。巳に衣裳をあらためし全く溺れてされ辨ふこしらへ出て舟を岸に住け。篤光が屍を脊に負ひ鎌倉さして急ぎけり。横山が奸計ぞ悪むべし是より鎌倉に還り奈何なせる做。そハ次編に分解を読て知りたまへし。

第四編

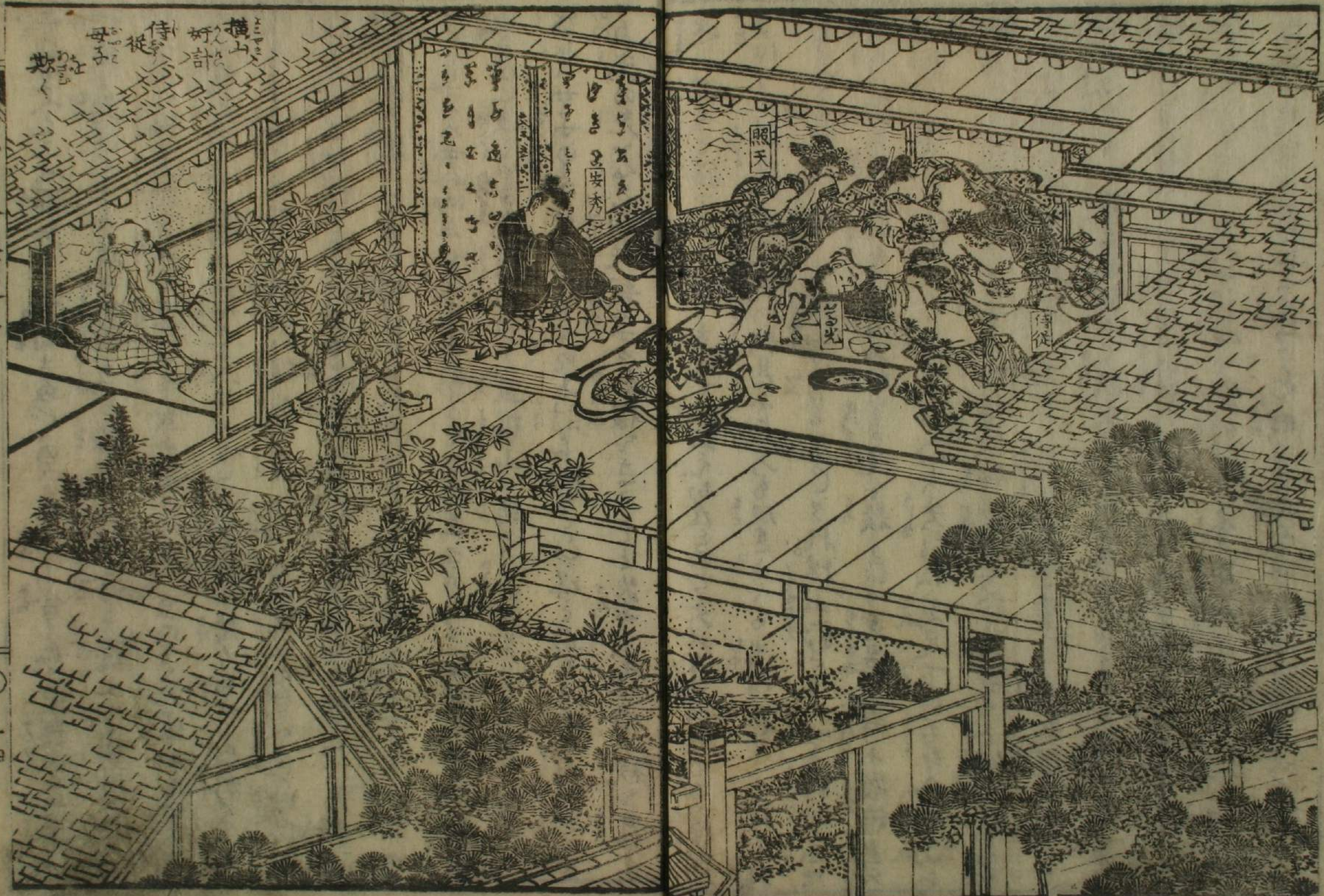
横山借計と一色に謀は
結城実事を家枚に訟ふ

斯く横山安秀ハ篤光が屍を脊負ひ道を急ひで夜のうちに名越が館に還りまつり。竊に裏門の音なへバ侍従ハ夫の帰り遅きを訝かり夜もねむらで待るゝひしに密かに後門を叩く音のきこえれバ胸うち騒ぎ自ら紙燭して走り出下僕を呼起して誰そと問かしに横山某なり。篤光どのいたく酒に酔たまひぬとて明なへとあるふたし。

の声なれバ。ヱヱくと門を放かしその身も門辺まで出てんとするに横山安秀
夫篤光を脊負ひきたるが。二人ともひた濡に濡て居るを着。いと浅からぬ
横山すぐ世手ふに臥所へとて通る。侍従ハ前に立て夜のものしける処へ
誘ひ入れ横山母ぐて篤光をかきおろさ侍従ハ瞻褥ひき被せて其傍にお
添て兎角さるに肌冷身かたまりて息絶て居ね此年をえるよりなく
いかなと驚きまどひ我夫いかにとなのそと声のかぎり呼叫べど事きれたれ
回意はし侍従ハ尚もせきたちて横山さらち對ひおんこの知らされたしとは
あらじいかなる縁故ぞ語り給へ様と問へど安秀うち歎息れ暫時回意を
せざりしがやあて涙なからぬひ。えすべく経通り。篤光どのも某も誘濡さる
どれそぬかしくのべ今日相模川に漁猟をとて彼川に舟を浮べ逍遥を徘徊
囲ハ下をとし。一回も空しきるにし鬼角をるに日も西のえと見れバ今日

それのて止まんとさんかしかど。あまり獲物の多かるに心ひかれたひてや我諫
を聴ず更闌るまで漁猟せしが。後ハ身も労れ酒にも酔たまへバ足の踏所を
踏失て川にざんぶと落まひね。これいかにと驚きつ。已まても其あとくわだつ
入り助け上んとせしかども雨気はさひくる月影に物のあやめも分ちべくもなく
此処よ尋ねるうちに時移を遂させ流の赤にて辛うしてからさとのけ
揚なれども。早や事きれて甲斐もなし。舟に残せし二人の下僕ハ賤しきその
性様く驚きまどふに騒ぎ乗せし篤光どのも某が夜服刀を奪ひまぎ何方
ともれく逃失たり。我一舟に居るからに篤光どのを溺らし死なせを
甲斐なきぞさするぞ恨なれども。嫡習とやひ且へすると年頃身を寄せける
恩人なりいかで疎略をそんそんと力の及ん限りをしたれども。命運乃
尽る処う詮なくべし我姉上への申訳なくふかく悟りて極しまり。それにありく

兎角のことせば妨多し。其は後日偽りならぬ赤心をば知らしめなばよし。
涙ながらにいへりければさしもの侍従は女なり。身がなる時計を巧しといへ露
ばかりは年頃の恩を報んと赤心をもしねとむつ想ひより些も疑ぞ。
去ては酔ての上の事なからは浮猿とのたまひさして夫の屍にすがりて。
悲嘆の涙に沈みけり。照天姫も初と見ようもなく走まろつ父の屍に縋
よりも天に悲しみ地に嘆き。臥転ひつゝ泣ぶ其れ横山安秀その首
たぶさを着よくも謀りけりと心裡密に喜び。面には愚なる色を顕し。
鼻うちかみていへりけるは母子の嘆きは道理ながら皇の光大人既に斯
なりましたる上は家の浮沈此時なり女なからも心を仮めよく思惟なされかし。
ましてや我一色詮秀とは断金の交あり彼人のことは當時清近臣乃
頭人にて執事の人よりも君の御おぼへよく且仁恵なる性質なれば我
速に彼人と議て家名を立んと思ふなり。おんもてところの奈何そと真実しく
笑ゆるに侍従は不図夫の所見にところも烈くよくも思ひとこける様だ。只
なきつゆとのこと回答して横山が言にまかしければ。横山竊と心に喜び。急に
一色が館に赴て詮秀に遭て篤光を殺しける光景を詳に物語るが。
詮秀喜び。手自悪しと思ひ一人をば失ひぬ。是足下の力なり我足下に
報ゆるに足下をもりて名武の所領を押領すべし。再せんと欲するなれ。
まして篤光が這回の死を変へ上るし。其附男子なければ家断絶と計りて
公の法なりと。我君を勧めて照天に女婿をめあはしむるで足下を其家の
孫とさすべし。世子家秋の彼是と支へは名武が家を立とも詮
なかるなれば一まづ家名を断絶させべし。其時足下よく謀を運らし
なまんすん。其功をもつて世に出ることを。我まつ衞をするべきに相かまへてころがし


横山奸計侍従母子を欺く
安秀
照天
侍従

てこしあの人と。二人類とよして尚さまぐのことを示し合しねさて横山は立還り。
侍従に対ひて申すやう某一色が館より帰るさ。詮秀に逢ふて迂回のことを
聞へしに好事門を出ず悪事千里に走ると常言のごとく。速くも知る光
大人横死の事。江戸の御館に入けるよし。詮秀我に語り聞しぬ。斯くして
隠すとも隠されねど。此上は横死のことを明白に聞へあげ。其御沙汰を
待のほか術なし。されども名武の家名亡び給はんやうなくも頼み
置れしは悪きにはあらじとありけるぞ。侍従は嘆の中にも此事は
聞より。元は女の心に弁べきにあらねど。血属ありける結城六郎朝光
返まはし泣く知る光横死のこと且横山が語りしことを其人へ告し。
奴家は女子の身なりおんをよろしく計らんとひ給ふとありければ持朝も
知る光の死を聞。侍従親子が心根をさこそと察しそゞろに袂を湿し

けるが。横死の光景を委くも御所に聞へけるよしを聞。却ての仔細をたゞすべきに
あらじとて。執事家枚安房守憲実の方に赴き。かし聞へければ
血属にても名武知る光去日に相模川に漁猟をとて溺れしも水に溺れて
亡びん。これ松に非命の死を遂ると不忠の罪遁るべからず。されば
妻子のものにいかなる御咎を命ぜらるとも此方も恨むべき事なしと。
名武は古き家といひ。且は御当家に対し旧功あれば。執事の憐をうけて。
君の御前をよきに云なし。家名だけをも立さしめんと。限なき洪恩に
あぐるにとうち嘆き侍へ聞へ。家枚眉をひそめ何とて宜しく篤光溺
死せしとや。嗚呼あつぱれ武士と亡ひけることの方ぞさま彼人は打物とりて
万夫の勇ありけるに。その孫をまで彼人も知りけるに。いかなれば溺死
をばなしけるならん。それ怠まれ自まれ。此事君に聞へあげ。おぼつかなきを

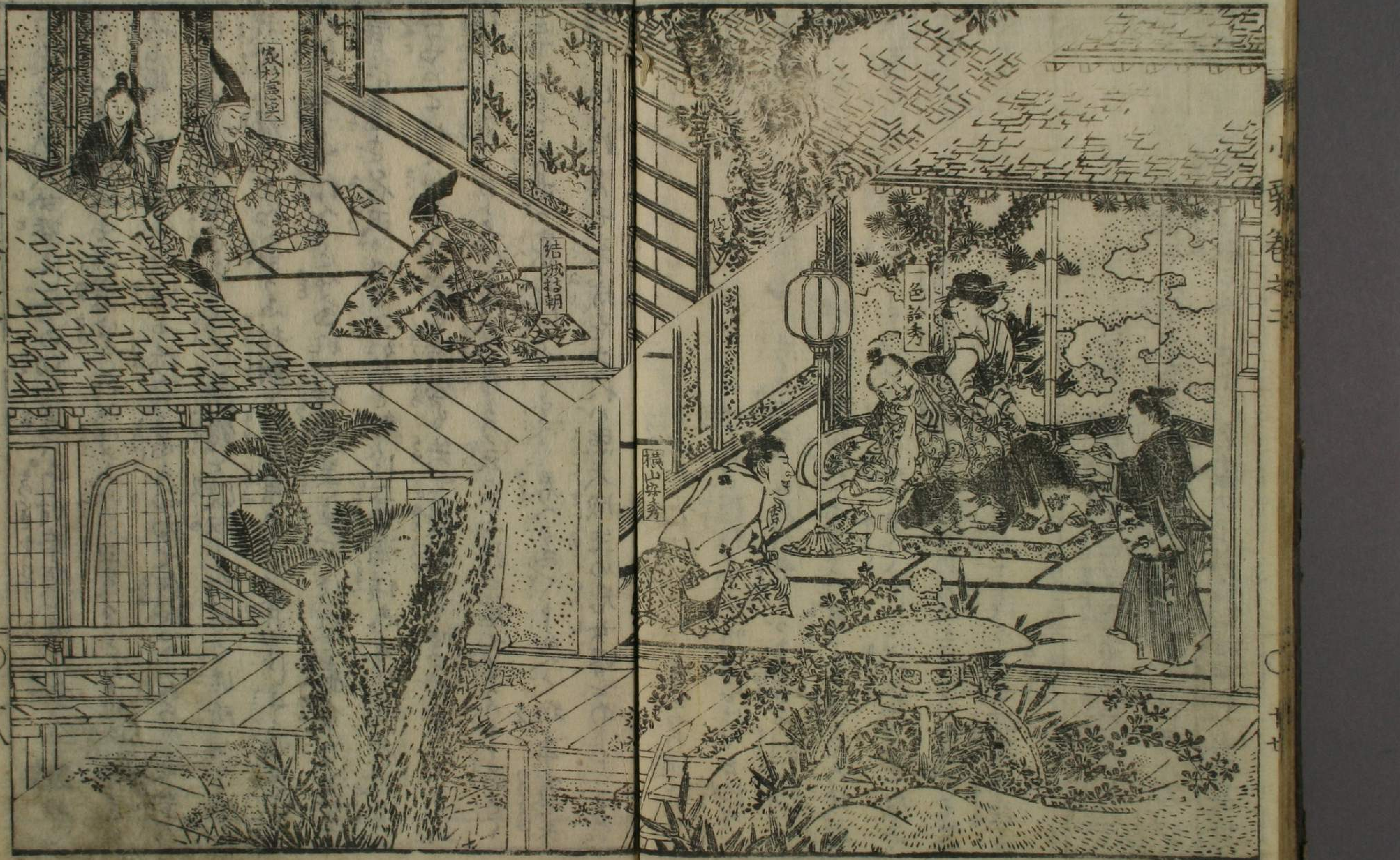
ありて沙汰も止じと枯朝を還らし俄に御不予なりけり。君の兄弟に入くや
なれば名武篤光奉じて捐捧川に漁獵して溺死せ給ふ旨。血属結城枯朝
ゆふかんは篤光私に命を失ひしと。甚不忠といふべきなり。此科に領を
没収し妻子を追放さるに及べり。されば名武も名家の末なれば且は舊
功のものなれば僅に其名跡をのこされしものなり。八州の諸大名君の御
仁徳を感じ東國まで昇平なりしと是へあげ奉れば君をいとも宜ね
前に御側に侍りし横山銓秀進み出て云へりけるは篤光君の禄を食
ながら其身を放埒に比し川狩遊興のみを沈みしは不忠の罪天翁免し
がたき非業の死を遂しゆゑんなるもの家を立らるゝ事あるべからずと怒るべきも
ありし枕事の中さうちくと無下にせんと甚捨なるべし似されぞ我に許ふ
旨あり今篤光男子なく女子一人あり年いまだ幼稚なれば彼女子成長
しなば然るべき女婿を迎ふまで篤光が妻の弟横山安秀して名武が家の後見
とあらば両全の議ともいはんか。去ば奈何となれば横山安秀にさせる罪も
なけれど讒者のために前年満兼公の御勘気を蒙りしものゆゑ彼が罪なきさ
ことおほやけに人も知たり。再びそのまゝわき罪ある名武が家を立まんこと。
御近年かぶれと浪べし。さとりて横山を名武が後見とし玉はゞ横山が
無罪のことども知られ一つは名武が舊好をも忘れざるは仁慈の御事と唄ふべし
ゆゑんさればぞやと憚る処もなくいひける。持氏公年頃にかくせくさまじへ
銓秀がいふ処を宜しとおぼし。家政を憲実に對し給ひ。銓秀がいふ処よろしと
執事の紀に問ひ給ふに存ゆと宜かくて憲実言を正してやけれど横山が
前年武蔵國の一領を与へられし民を治めるに偽多く百姓の嘆大方ならず。それ
人あるに諸士に對して彼の身多く止事なくして終にその小帯を没収し

まじきことハ誰〻もよく知けれバ。いかで彼をして名武が後見させじ。其所へ乃
出仕をやめさすべき。狂くらせば。諸士の心背れバ。いかなる不思議か生ずらんと
ひとへになずらふ持氏公の御代に仕りつる年老たる人〻に對しせまひ我年幼稚て
横山ハ勤氣蒙りし時のことだに。おぼつかなも知らねバ。執るすがゝを処と。一名か
中を取と何より実に其事のもとめを下と宣へば。人〻謹どとを執るもの
中ハ所こそ実に如と回度甘ば。詮秀都合を変て斗かれバ来もその
時のことだによく知ねバ。いかで偽をなしべき。人〻を執るものゝ權威を懼ざ一斯く
やをとおぼゆなり。趙高が馬とりて鹿といひしためしもあるやと。心がかり
きゝて述るなるぞ。憲実これをきゝて胸中憤り懐き。詮秀我をとりて趙高に
比し不臣の名を負せんとするでう奇怪なり。と既に甚無礼過言に及びさんと
せしがまて思ひ。今此処にあらそひて鬼角を争ふ。君幼稚おはしませバ。其御前にせんと

憚らず我權を逞うせんと。おのれの行状をとりつくろはゞ。趙高が名ハ逃るゝとも
まこと梁冀が名をバ負べし。忠臣の道なりと想ひ入して憤りをはらさバ詮秀が
言をかならず我が如くにて君に對て申されバ我〻が昔日に討らんぢや。
君幼穉におはします。今日に定むべからず。君よく清らかに疑
清當家の法制を乱しあひ。身と共へ上る。寛くとして清家をとこそはりて
なる憲実がふるまひ優美の良将やと感ぜぬものもなかりけり。そもそも
却さく詮秀ハ我意を逞し。高慢くと讒言申けるぞ。幼稚に在を
持氏公の代に一旦が中処を是とし。あひならも。さらさら執るもののいとひ法
ことも多くに捨がたく。明日憲実を此所に召し昨日執事の役へ任じける名武
が武熟て思惟をふ彼の家の嗣をさせ男子なき時ハ。旧法あるまじ
一回へ所領を没収さるべし。されど名家のことなれバ。女児猶天成長せん后。

積悪を養ふ徒や闇夜の如く

顕るゝの是を明白に訴ふハ旭の如し



さん人きりの外女婿とし。一ツの功を立なば。其時某が本領を返し与へんと思ふぞ。
といふかと宣ふ。憲実これを聞て些の曲事あることなれど命なれば
大に感じ。命をまもりて法に称くり。某においては何とかしはべらん。厳命の
ほどを畏み名武が妻子おやに所領を没収しけると。汝所沢までへとく
我舘にありけるが密かに持朝を返し。命の旨を告知らしむ。その二三人痛傍じて
は使の至るを待べしと申されば。持朝望を失ひけれど。厳命なればまで
畏みて急ぎ名武がもとにかくと知らし其痛傍志あるへとありければ侍従
母子はこれを聞より幸も消も失て象幻なく嘆かりこれより前
横山安秀がもとへは一色詮秀より云ごしたりけるは。豫てそうりしやごとく
足下とりて名武が家の後見させ給く。君にさべくや御心をど。執事憲実
のさゝゆるによりて事成をきれば照天成生の后女婿とめふさせまし。

名武が家断絶さるべきにあらねど。かくても日を移さずしては使至るべく
名武が鉞をうけとるべし。後の謀れぬるなり。此時油断あるべからず。計ひ給へ。
とありければ。横山は此告を聞て心裡に想ふやう。兎角に侍従母子
が欺きて。何方へも倶して立退き。我ちからひとりて照天を女婿とせし
本領安堵させなば。名武が家を我のものにせん。夫よりも今此家に
貯ある金銀財宝を奪はゞ。五三年がほどは栄利を倣ふに足りなんと喜ぶ。
処に只今持朝の告により侍従親子が嘆くを着て信なりけるうちに。
さまざまに誹慰め折から。小栗満重がもとより消息して云こしけるは。
這回篤光との不図に宿鋼を遂するよし承りて驚入てゆく人々の
嘆さぞと察しまゐらせぬ。まことや聞ゆらん今日御所よりは使ありと聞ゆる。
り。事ありもしはらん由は照天どのは小次郎が妻なり。何が苦しかるべき這程へ

御こゝろの趣も角もよきに計らひまゐらすべしと。いと頼母しく見へけるにぞ。侍従ハこの書翰をとりて小栗が志気のやさしさを喜び。斯て小栗がかたへ行んとあるを横山うち聞ていへりけるハ。いかに殊勝人持給の告しといひおくりしや。名武ハ名家のことなれバ一旦王法によりて断絶をとりしかど照天生長の后。おもふべき人を女壻とし。一ッの功をたてバ本領安堵さるべし。との命のよし。君がゆるし旨あると。照天とりて。小次郎に嫁さバ君のこゝろに差ふの名武の家を再興あるべきぞ。これこれハはなきことぞや。小次郎ハよき女壻なれど兄弟もなき一子也。且ハ御所に給事されバいかにとも名武が家を嗣すまじ。よしなき縁にはなされて。永く家名を立ると忠孝とハいひ難し。此道理を弁へて。小次郎と照天とを許嫁の約を変へさるべき人が専らな

なへと理を尽して説さとしたまふ。されど女のあさはかなるに横山が欺きをしらず。其露ほども知ずして。理の当然に言なりと。照天姫ようち対ひ。率既に今日に及びてハいかにとも做べきやうなし。家を再興することぞ孝の道なり。よくよく其心得あるべしと宣ふ母が言に。照天姫ハ初稚なれども。その志気正しく。一回許嫁せし小次郎と縁を絶んと宣ふよりも。早く涙流して泣きけるが。漸ありていへりけるハ。生平に父母の宣ひしハ。忠臣ハ二君に仕へず。貞婦ハ両夫にまみえずと。いへる本文あり。況や小次郎に許嫁をなしたるハ是則小次郎が妻なり。たとへいかなる事ありとも他人へとりてまゐらせんとハ添くも教訓しまひき其の言の心に志み。忘るゝ身のものゝふの家の為とハいひながら貞操を守り。烈婦と世に誹られんこと。哀しさよ。斯く術はなからんぞやと。かきくどき嘆きけれ。母ハこれを見るに悲しく。あはれ賢き我子やと。

倶に轉びてかこち泣く。横山照天はうち對ひ。おそろしいは道理じや。さり
ながら。かゝる不幸の時に臨むとも。おとろへ給ふな一ツには。家の浮沈は定めぞかし。
心をおちつけよく聞給へ。昔の貞女は操を破て夫婦の名ありといへどもおことは
枕席を倶にせざるゆへわらはゞ許嫁なるのミ小栗と縁を斷とても
いまだ節を失ふ婚婦ならん。幼稚ゟのひごろ父の教を守りて
成人も及ばぬ孝子なるぞ。さはいへ後なき不孝を思ひ弁へぬ方ならんさぞ
言を巧よりひなせバ侍従も實開ありと思ひより我子が多く諫をハ
照天姫は心にも有ぬ孫と母の命なれば乖くべき事にもあらざればうら
それに従へと心裡ハ文叔が妻の操も物かハと。想ひ定めぞ健気なる事
折しもあれ外の方ゟ人と聞し。注進の使ありとぞしらせれバ
侍従母子は驚てその名を聞とれどもまさしからぬる憂目に遭んぞふんと。

驚るゝはさもぞ道理じや。とうに家の老僕に養登小四郎と云者あり
けり。二なき忠義のものなるが。前年より篤き光の命により。所領なる常陸
の國に居て。耶撃のことよりして萬沙汰しけるが。這回主の横死を
聞て大に驚き名物もとりあへず。晝夜を弁ず走ければ。やうやく
今日鎌倉に着き。主の館に來ける所に。多くの人数弓長刀を携て。
館のめぐりを囲めり。これはいかにと驚きうろたへ。門の裡に入らんとするに。
一人の侍馬に跨り下知を傳へて云へりけるはゐる光私の名に非命の死を
いたせしと君父を忘るゝ不忠の罪逃がたし。甚所領を没収し。その館を
破却あるべしと鎌倉殿の命を蒙り。此地方に差向ひより一家の老ども
速に館をあけて立退べしと呼ありし。是誰なるらんと窺ひ着るに一文
詮秀が手。一文尤東亮亜兼之小四郎は主家の亡ぶるをさして氣も

失果て。惆然として居たりしが忽ち心ありとや座しかゝる大凶にあふもことハ運命なり。今さら悔て甲斐なきものをたゞ此上ハ夫人大姐の比身の上こそ氣づかはしと一文直兼が馬の前にすゝみ出てやゝ久しくありしが主ハ篤光が老僕義登小四郎とやらをそのゝ子て此程常陸國に居たりし。主の死せるをうけたまはり只今まゐりたれどもおそれ門の裡に入ることを御免あれかしと述ければ直兼聞てうちうなづき君の命あれば門の裡へとも入べけれど叶まじとて告べしと制しければ小四郎尚も身を忘れ是非御免を蒙らんと多く陳じけるを直兼其ことを挨で上意に背くハ白痴なり。それ郷よと言のおはらざるに雑兵ども立かゝって郷人とともに小四郎今ハ詮もなし。嗚呼聽弁の亡き人とぞなる。上意ハ免すれ角もあれ我志の遂ざれバ生存命てはかなせん。一人死んも風情なし。黄泉の途連作んと腰の刀を抜手もみせず近づきよりし二人を二ツ四断に斬ならし尚も近よるものども或ハ袈裟ぎり車斬あるひハから竹梨子割に一盃茶時に十四五人枕を並べきり伏たり。這小四郎ハ元来武藝勇力に誇まし且も忠義の為に死を極めてなれバ日頃にまさる太刀風に秋乃紅葉の木の葉武者散て齋附ハよりもとぞ。小四郎此隙を窺ひそ凶門の傍の塀を乗越鉄の裡に走り入隈なく残る処もなく主の行方を捜索どもいづ方へおちゆきしか甚だ心もとなし。其のぶ家隷ある婢女や老たる下僕に問ぬれどこれさへ知らずと回應ふ。こハいかにせんとたゞひとりふたりや一色直兼人数を引連うち入たるぞ彼輩によりてられが卒然と後門より竊に逃れ主の行衛もたづねんと何地に定む方ハなけれど足にまかせて落行たる光楳死て侫奸反逆人の

小四郎
勇戦
女多の去向を
捜索
義章小四郎

罪科に所せらるゝがごとくは使を殺すべきものなれども。足塗秀が
縁ありて一旦正兼が内意を受へかくはなからひたるものなれバ。奈何
縁故ぞといふに此一件渾て家政憲実の知る所なれバ彼が非道の
政道をし諸人を家政を蹴らしめん為に謀りてありけるとぞ。且説
小栗が名武が館に使せしの其回意を深く疑ひしに。
俄に御所よりの御使なりといふほどこそあれ。名武が館ハ鼎の沸が如く。
騒動大かたならざれバ使ハそのまゝに逃げ還り。縁故を告知らす。満重
驚き再び人を出して光景を窺はするに。館ハ官領よりの軍卒を
率れ侍従照天の行衛知れずと歎けるに。満重易からぬ事に思ひ。
人を四方に遣して其在家を捜索するに知ることなかりけり。小栗ハ
一人の新婦を失ひ兎角まゝに途方にくれておはしけり。小栗小次郎が

乳母人は萩浪とよびけるが。故ハ武州六浦なる海士の妻なり。一人の
女児を産てのち夫なりけれバの設命はれバ今日を送るべき生産
なく。女児をバ人に与り。其身乳汁あるをもて小栗に給仕小次郎が
乳母人とハなりけるに。先年冷利生れまれバ小次郎に傅けることに
まめやかしかりしかバ。満重よ婦人もより乳母人を召しうと喜び不便を
加へて召使ひしに。去る年妻の初瀬辞世のちハ満重独身の淋しさに。
萩浪がまめやかしく。容貌も人醜からざれバいつとなく閨の伽とハなしにけり。
る世の契やありけん。いく程なく一人の男子を産りけり。満重ハ小次郎が
外に子なかりけれバ。いと頼もしく思ひ一入に五十にあまりて又一子を
まうけしを悦バ。かぎりなく喜び名を万寿代と呼なして愛されしとと
比しなし。かゝりけれバ萩浪が威ものづからほよく。家人も妻のごとくあがめ

なりけるに。甫るに放浪素賤きものなるに。且貪欲なる性なりしが。俄に
我子人に殺されけるにつけ驕の心出来。小次郎なからましかばわが子
万代こそ小栗が世嗣となるべけれ。めでたくこれより小次郎を疎んずるに
こそ方々なれかゞりしかども。時々小次郎がことを満重に讒言しつるに。
満重も次第に愛日暗まされ浸潤の譖。膚受の愬終に行はれて。
小次郎を悪むといふにはあらねども。まさに昔に似ずなりゆきぬ。されど
小次郎は孝心深きものなれば。父の疎きを恨みず。我心の昏ぞと尚も
ますます孝を尽しける。爰に今年応永廿二年。関東の下にはおぼつかなく。
群盗蜂起し。賦税を侵奪し。民財を奪ふよし。鎌倉への注進櫛の歯を
ひくがごとし。管領持氏公やすからず思し。執事家老と評議ありて。在鎌倉の
諸大名を。其領分に下し。速に賊徒退治すべしと厳命ありければ。

北郷芳

各領分として其の領国へ下りける。小栗満重も所領のうち群盗あるに
より。速に来るべき所に。当時病労にかゝりて。我行ぐに能はず。男児
小次郎を代官としてさし下さんと。事の由をいひあげしに。速に御免状
蒙りしかば。さらば下さんやと想ふに。小次郎今年十七才なれども未総角
ありて男になりぬほどが。形て六人の用ひもいかゞぞと。俄に元服させ。名を助重
と名のらしけり。此時小次郎。父が代官せしをとりて。これよりして世の人小次郎
小栗判官代助重とよびならはせり。却て助重は父の命を稟て。家子
老党数多召俱し。領国常陸の方へ赴きける。

小栗外傳巻之二

[illegible]一貫国常陸の国へ[illegible]。
[illegible]小栗判官[illegible]重[illegible]父の命[illegible]
[illegible]小次郎父と[illegible]
[illegible]人の用[illegible]
[illegible]今年十七[illegible]
小次郎[illegible]年の由[illegible]
[illegible]
[illegible]小栗満重[illegible]